



大妻多摩中学校

二〇二二（令和3）年度

入学試験問題（午後）

【国語】

時間 50分

2月1日（月）

【注意事項】 1 問題は15ページまであります。

2 指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。

3 答えはすべて、問題の指示に従って解答用紙に記入してください。

4 句読点やカギカッコは一字と数えてください。

5 ページが抜けていたり、印刷が見えにくい場合には、手をあげて知らせてください。

一

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、本文中の表記は原文のままにしてあります。字数制限のある問題は、句読点やカギカッコも一字と数えること。

人類の滅亡をいうことは、昔からたえず論議されてきた。近代化学工業がおこって、^①先進国の工場の煙突がきそって黒煙を吐きだしたとき、人類は酸素不足で滅びるのではないかとさわがれた。科学者は^②植物の炭酸同化作用（炭酸ガスを吸ってデンプンを作り酸素を放出する）のこともちだして、人々を安心させた。

その後、原子爆弾の脅威が、人間に滅亡の恐怖を抱^{いだ}かせた。『渚にて』という映画が人々に大きなショックを与えたのもそのころである。しかし今日われわれは、原爆などという劇的な原因によらない、しかももっと深刻な滅亡の危険を、きわめて現実的な不安として感じざるをえない情況に立ち至っている。

だが、一口に「滅びる」とか「滅亡」とかいうけれど、滅びるとはいったいどういうことなのかまずそれをはっきりさせておかねばなるまい。

ある種類の生物が減びるとか絶滅するというのは、その種類に属する個体が地球上から一つのこらず消えうせることである。絶滅というと、われわれはすぐ恐竜のことを思いだす。たしかに、あの巨大で、しかも地上に^③君臨した動物の絶滅は、われわれの心に何らかの感慨をひきおこさずにはいない。

しかし、恐竜はある日突然にして滅び去ったのでもないし、一〇年や二〇年のうちにすべてが死にたえたわけでもなかった。数百年あるいは数千年かかって、しだいに数がへっていつて、ついに消えうせたのである。

人類が減びるという場合には、きつと^④同じようなことがおこるであろう。昔は原爆で地球が吹っ飛んだり、放射能で人類がバタバタおれてゆくようなイメージが、人類滅亡のイメージであった。しかしそれは多少甘かったようにも思われる。というのは、それさえ防げば、原爆さえ使わねば、人類は滅びたりしない、という^⑤論がそこにはひそんでいたからである。

今や、問題はそんな^⑥かっこいい形であらわれてくるのではないことがはっきりしてきた。人類がもし滅びるとすれば、滅亡はみ

んなが繁栄だと思っっているうちに、じわりじわりと、それこそ何世代にもわたって忍びよってくるものなのであろう。そして、いったん滅亡へむかいはじめた種類は、たぶん救いようもなくそこへむかって近づいてゆくのだろう。自分の種類の運命など関知しない他の動物ならいざ知らず、自意識過剰の動物である人間にとって、このじわじわと進行する滅亡は、耐えがたいものとなるだろう。そこには**ほろ**の美学などは存在しないにちがいない。

それではどういうときに、動物は滅亡への道を歩みだすのだろうか？ 新潟県のトキやアメリカのリョコウバトそのほかについては、かなりよくわかつている。それは、主として、人間による環境破壊と**らんかく**のためである。けれどこのことは人類にはあてはまらないようにみえる。人類はだれにも「乱獲」などされていないし、環境は人間が作ってゆくものだという信念は、だれもがもっているとおりであるからだ。そして「突然変異」などというかなり魔術的なことが普及したために、いまに公害など平気という突然変異もあらわれてくるように考えられている。問題をすこしちがった面から考えてみることにしよう。

ハチドリという小さな鳥は、だれでも知っていると思う。鳥のうちでいちばん小さく、体の長さわずか三センチ、スズメバチよりほんのわずか大きいだけという種類さえある。小さな巣を作って、豆つぶぐらいの卵を産む。そしてチョウかミツバチのように、花のみつを食物にしている。小さなつばさをブーンとふるわせ、飛びながらみつを吸うのである。それを始めて見た人は、なにかおとぎ話の世界にいるような気がするにちがいない。

でも、この鳥はこの **⑦** の世界に生きている。こんな小さな鳥が生きているということは、それ自体がふしぎである。なぜなら、こんな小さな鳥は生きていられるはずがないからである。それは次のような理由による。鳥はわれわれと同じく、温血動物つまり恒温動物である。体温は外気と関係なく一定に、しかも人間などより高く、四〇度近くに保たれており、それが保てなくなったら、人間が凍死するときと同じようにして死んでしまう。ところが、体がこんなに小さくなると、大きさにくらべて、体の表面積がいちじるしく大きくなる。つまり、体温を保つに必要な熱を発生する体の大きさのわりに、**⑧**

のである。そこでハチドリが生きてゆくのに必要な体温を保つには、体表から逃げてゆく熱をたえず補っていないと、さもないと、体温はたちまち下がってしまう。

ハチドリは熱帯にいるから、そんなことはないだろうと思う向きもあるかもしれない。しかし実際には、熱帯の夜はけっして暑くない。すくなくとも、東京の夏の夜のように暑いことなどはなく、気温は二〇度を割ることさえあるという。

ハチドリの「経営状態」、⑨ 食べたもの（収入）と体温保持のための熱放出（支出）との収支決算をしらべてみると、⑩ おそるべき自転車操業であることがわかる。入るそばから支出されてゆき、それによってやっと収支をつぐなっているのである。収入が断たれたら、数時間ならずして倒産してしまう。つまり、食物を食べるのをやめたら、たちまちにして熱発生がとまり、体温が下降して、餓え死にというより凍死してしまうのである。

ハチドリも鳥である以上、鳥目である。⑪ 夜は木の枝にとまってねむるほかはない。毎日一二時間近い間、断食するわけである。本来なら、この長い絶食期間は、エネルギーの貯えたくわをつきはてさせ、体温降下と凍死を招くはずである。にもかかわらずハチドリは、何万年という単位の長い年月にわたってちゃんと生きている。なぜか？

そのわけは、彼らが毎晩冬眠に入るからである。毎晩冬眠するというのはいささか奇妙ではあるけれども、事実そうとしかいいようがない。ハチドリは、夜が来ると、温血動物であることをやめる。体温調節という小細工をやめて、昆虫や爬虫類はちゅうのような冷血動物（変温動物）になってしまうのだ。体温は一挙に気温のレベルまで下がる。呼吸もごくわずかになり、筋肉も動かなくなる。だから、夜、眠っているハチドリは、やすやすと手でつかまえられるそうである。そして朝がきて気温が急速に上がりはじめると、ハチドリの体温も上がる（変温動物なのだから）。そして、体温が一定の値をこすと、がぜんハチドリはめざめ、恒温動物となって花のみつを求めて飛びたつ。

人間にもしこのような能力がそなわっていたら、山の遭難はずっとすくなくなっているであろう。⑫ このような能力は遺伝的なものであつて、きびしく訓練すれば多少はなんとかなるかもしれないけれど、実際上は獲得できるものではない。ハチドリは、体の小さいあのような鳥としてできあがったときに、体の大きさと表裏一体をなして、⑬ この能力を遺伝的に獲得したのである。もしそうでなかったら、ハチドリは熱帯には生存できなかったにちがいない。

問1 —— 線部①「先進国の工場の煙突がきそって黒煙を吐きだした」の中に含まれている表現技法として最も適切なものを、次の

ア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 直喩^ゆ イ 擬人法 ウ 倒置法 エ 体言止め

問2 —— 線部②「植物の炭酸同化作用（炭酸ガスを吸ってデンプンを作り酸素を放出する）」とありますが、この作用を「光」を使って行うことを何と言いますか。一語で答えなさい。

問3 —— 線部③「君臨した」の意味として最も適切な言葉を、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア たいへん長い期間生き続けた。
イ 自分たちの生きやすい環境に変えた。
ウ 絶大な勢力を持って、他者を支配した。
エ 他者と戦って、自分の居場所を守った。

問4 —— 線部④「同じようなこと」とありますが、それはどのようなことか、文中の語句を用いて三十五字以内で答えなさい。

問5 ⑤・⑦に入れるのに最も適切な言葉を、次のア～オの中から一つずつ選び、その記号を答えなさい。

- ア 現実 イ 幻想 ウ 肯定 エ 抽象 オ 楽観

問6 線部⑥「かっこいい形」という言葉を使ったのには筆者のどのような思いがこめられていますか。最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 人類滅亡が、劇的な形によってもたらされると考えている人々への皮肉がこめられている。
イ 人類滅亡は、人間による環境破壊が主な原因だと考えている人々への疑いがこめられている。
ウ 人類滅亡は、戦争などの深刻な原因によつて起きると信じている人々への怒りがこめられている。
エ 人類滅亡が、人々に関知されないうままに進行していくと感じている人々への共感がこめられている。

問7 ⑧ に入る言葉を、十五字以内で答えなさい。

問8 ⑨・⑪・⑫に入れるのに最も適切な言葉を、次のア～オの中から一つずつ選び、その記号を答えなさい。

ただし、同じ記号を二度以上使用しないこと。

- ア また イ しかし ウ つまり エ なぜなら オ したがって

問9 線部⑩「おそるべき自転車操業」とありますが、なぜ「おそるべき」という表現を使ったのですか。その理由を含む一文を、文中から抜き出し、その最初の十字を答えなさい。

問10 線部⑬「この能力」とありますが、どのような能力ですか。文中の語句を用いて五十字以内で答えなさい。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、本文中の表記は原文のままにしてあります。字数制限のある問題は、句読点やカギカッコも一字と数えること。

様々な工夫を凝らした料理で客をもてなしていた料理屋「つる家」の女料理人の漣は、あるとき食べ物のにおい、味がわからなくなってしまう。そんな漣を見かねて、以前から親しくしていた又次が「つる家」の臨時の料理人として腕を振るって漣に負けない料理を作ってくれ、「つる家」は苦境から抜け出した。臨時の料理人としての役目を終えた頃、江戸の町で火事が起こり、又次は漣の幼なじみを助けるために大やけどを負って亡くなった。漣は、又次の新盆を前に又次にふさわしい膳を作ってほしいと「つる家」の店主から依頼され、苦勞して料理を作り上げ、七月十三日から十五日までの限定の献立とした。その料理（精進膳）の名前を「面影膳」という。

「漣姉さん、鯖がこんな風になりました」

桶の上に筥が載せられ、そこに塩をした鯖が置かれている。どれ、と漣は筥を手に取り、鯖の様子を見た。

良い具合に塩が回り、筥の下に置いた桶に水が少し溜まっている。

「良い塩梅だわ、ふきちゃん。このまま、もう暫く置きましょう」

漣は満足そうに、見習いの少女に頷いた。

これで鯖寿司を作るつもりだった。しっかりと水を出して、葉蘭で巻いて、と手順を考えるだけで心が弾む。ふきも漣の傍らから、鯖の状態を目に焼き付けていた。

「久しぶりですねえ、注師走朔日をこんなに穏やかな明るい気分で迎えるのは」

黒豆の話題で笑い過ぎて浮いた涙を拭い、りうはしみじみと言った。

料理人と見習いはもう鯖に夢中で、老いふたりの遣り取りは耳に入っていない。

りうと並んで板敷に腰を下ろし、そう言やあそうだなあ、と店主も頷く。

「三年前に、とろとろ茶碗蒸しで初星を取って以来、俺あ①欲の塊になっちまった」

そのためにお濔坊には随分と辛え思いをさせたに違えねえのさ、と種市は声を落とした。

例年、師走朔日には浅草の版元、聖観堂が注2料理番付を売り出す。相撲番付を横して、その年に売り出された料理屋の料理を格

付けするのだ。巷に料理番付は数多出回っているが、聖観堂の番付表は何処よりも信頼できるとして、江戸っ子たちの絶大な支持を集めていた。その大関位をずっと保持し続けているのが、注3日本橋登龍楼だつた。

「もう俺あ、今年つから番付は買わねえと決めたのさ。そしたら注4憑き物が落ちたみてえに楽になつた」

店主は言つて、両の拳で肩を交互にとんとんと叩いた。

②暖簾を出すまで、このまま穏やかに刻が進むかに思われた時だつた。

「親父さん、親父さんは居るか」

大声で、店主を呼びながら、伊佐三が注5勝手口から飛び込んで来た。

「伊佐さんじゃねえか、こんな朝っぱらから一体どうしたんだよう」

両の膝頭に掌を置いて荒い息を整えている伊佐三に、店主は恐る恐る尋ねる。

「親父さん、つる家が……」

伊佐三は懐に右手を突っ込むと、折り畳んだ刷り物を引っ張り出した。

「つる家が返り咲いたぜ。見事、関脇に返り咲きた。この通り、番付に載ってるぜ」

「何だと」

種市は伊佐三の手から半ば奪うように番付表を受け取ると、皺に埋もれた両の眼をかつと見開いた。濔とりう、それにふきも脇から覗き込む。

大関位の欄には、日本橋登龍楼。その隣り、関脇位には「元飯田町つる家」と確かに記されていた。だが……。

「えっ」

そこに書かれた料理名を見て、^④種市が素つ頓狂な声を上げ、尻餅をついた。

「これは一体どういうことでしょうかねえ」

店主から取り上げた番付表に見入って、りうは戸惑いを隠せない。

「それに何より、登龍楼のこの料理……」

天の美鈴、と記されたものを示して、りうは ⑤ を捻る。

「これって、濡さんの鼈甲珠を真似た品じゃありませんでしたか」

その時、おりようとお白、^{注6}それに ^{注7}芳が 入れ込み座敷から調理場へと駆け込んで来た。

「お前さんの声が座敷まで聞こえてね。本当に嬉しいこと。濡ちゃん、おめでどう」

おりようは濡の手を取り、身を弾ませる。

「蒲鉾は間に合わなかったけれど、鯛の福探しに牡蠣の宝船、^{注8}三方よしの日の吹き寄せ、と今年もつる家は名物料理を次々に送

り出したんだ。あたしゃ、内心、関脇は当たり前だと思っちゃいたんだよ。で、どの料理が関脇位を射止めたんです？」

最後の台詞を店主に向かつて言い、おりようは ^⑥老女の持つ料理番付を覗き込む。その刹那、おりようは息を詰め、吐き出すこと

も忘れたように固まった。

「どないしたんです、おりようさん」

おりようの様子があまりに異様で、芳は案じつつ、その肩越しに番付表を注視した。そして同じく、戸惑いの表情になった。

「濡、これは一体……」

問われても、濡は答えることが出来ない。

そこに記されていた料理は、「面影膳」——もとは又次の供養のために考案された精進膳で、つる家では三日精進の折りに日を限つ

て供されたものだったのである。

「ご店主、濡さん、それに皆さんも、この度はおめでとうございます」

他のお客の姿が消えた入れ込み座敷に、注9 坂村堂の晴れやかな声が響く。隣りで注10 清右衛門が不機嫌そうに、好物のはずの蕪の柚子漬けを食べていた。

「いや、そいつあ」

店主は弱ったように頭を掻いた。

「正直、戸惑うばかりで。他に選ばれて良い料理もあるのに、どうしてあの料理だったのか」

なあ、お濡坊、と店主に話を振られて、濡もまた、応えられずに俯いた。

「聖観堂も中々の策士よのう」

清右衛門は空になった小鉢を濡の鼻先に突き出して、⑦ 嘲る声を上げた。

「大関位を射止めた登龍楼の『天の美鈴』はひとつ二百文。酔狂な金持ちしか口に出来ぬわ。片やつる家の『面影膳』は三日精進に限って商われたもので、口に出来たのは幸運な常客のみ。ともに大半の江戸っ子にとっては見知らぬ料理よ。例年、同じような取り組みばかりでは飽きられるからな」

戯作者の得々とした話し振りは、まだ続いている。

中座して調理場で蕪の柚子漬けを装いながら、濡は考え込んでいた。清右衛門の言う通りの意図で選ばれたものなら、それは純粋に料理そのものの評価とは異なる。料理番付とは要するに聖観堂によって催されるお祭り騒ぎに過ぎないのではないのか。

丹精込めて考え出した料理がそうした使われ方することに苦い思いが込み上げて、濡はそつと胸の辺りを擦った。

異変があったのは、その日の夕餉時だった。売り出されたばかりの番付表を手に、つる家を訪れる者がぼつり、ぼつりと現れた。いずれも、料理番付関脇位を射止めた「面影膳」を食わせろ、という初めての客ばかりだ。

「相済みません、あれは用意がなくて」

りうが二つ折れの格好で詫びると、大半の客は悪しざまに罵って、注11踵を返す。

翌日になれば、そうした類の輩はさらに増え、朝からひっきりなしに訪れることとなった。

店主に頼まれて、滯は一応、面影膳の中の「謎」を夕餉の献立に載せるべく用意した。熱々の水豆腐の揚げ物を種市は板敷で味見したが、随分長く、ひとりで考え込んでいた。種市の視線が、又次の遺骨替わりの灰を納めた壺の方に向けられているのを認めて、その心中を慮り、滯は⑧声をかけなかった。

「おや、旦那さん、それは何です？」

夕方、内所から一枚の紙を持って現れた店主に、遅い賄いを摂っていたりうが尋ねた。店主はふきに芳やお白も呼んでくるように命じ、全員が揃ったところで、徐に紙を開いた。そこにはまだ墨が濡れ光る筆跡で、「面影膳、文月十三日から十五日の三日間のみ」と認めてあった。

「これを表に貼っておくから、もし『面影膳を食わせろ』ってお客が来ても、出来ねえものは出来ねえ、ときっぱり断ってくんない」店主の決断に、皆は表情を引き締める。

事情をよく知らないお白が、差し出口とは思いますが、と大きな身体を縮めつつ、店主に尋ねた。

「もしも今、面影膳をつる家の献立に載せれば、番付に載った料理を食べようと新たなお客が詰めかけて、店も今以上に繁盛すると思っんですよ。人手も足りてるし、充分、やっていけると思っんですが」

「だが、それもほんの一時のことだろうよ」

種市はお白に面影膳が誕生した経緯をかいつまんで話した上で、

「⑨三日精進の間だけでも、皆それぞれ、胸に棲んでる大事なひとを思って食ってもらいたい。あれはそういう料理なのさと、結んだ。

ばん、とりうが大きく両の手を打つ。

「それでこそ、つる家の店主ですよ。又さんだつて、あの世で胸を撫で下ろしてますとも」

りうのひと言に、残る奉公人たちも互いに頷き合った。

表格子に店主の手で紙が貼られると、番付表を手に面影膳を食べてやろう、と勇んで足を運んだ者たちから不満の声が上がった。滯は表が気懸かりで、鰯の蒲焼きを炙りつつ、⑪を敬てる。

「お月見は十五夜十三夜、菊酒は重陽の節句、つる家の面影膳は三日精進限りです」と歌うように諭す、りうの声音が優しい。

「つる家は本当に良い店ですねえ」

流して汚れた器を洗っていたお白が、つくづくと洩らす。

「目先の商いに囚われることなく、料理というものを何より大事にする。それがつまりは、お客を大切にする、ということですからね」

料理人にとつても素晴らしい店ですねえ、とお白は囁み締める口調で言い添えた。

(高田郁『美雪晴れ みをつくし料理帖』〔時代小説文庫(ハルキ文庫)〕より)

注1 師走朔日——十二月一日のこと

注2 料理番付——相撲で強さによって各力士の序列を決めたものを番付というが、それをまねて料理屋の出す料理の人気によって最高位は大関、その下に関脇という順に番付にした。

注3 日本橋登龍楼——江戸屈指の料理屋。その地位を守るためにいろいろな手段を講じてくる。

注4 憑き物——人に異常な言動をさせる魔物などの働き。

注5 勝手口——台所の入り口。

注6 芳——両親を亡くした幼い滯を助けてくれた人物。今は滯と一緒に暮らしている。

注7 入れ込み座敷——別々に来た客を一緒に入れる大部屋。

注8 三方よしの日——一月に三度、「三」のつく日に、七つ時(午後四時)からいつもは出さない酒を客に出してもてなしていた。

注9 坂村堂——神田の版元(現在の出版社のこと)「坂村堂」の店主のこと。

注10 清右衛門——売れっ子の戯作者（現在の小説を書く人のこと）。

注11 踵を返す——引き返すこと。

問1 ——線部①「欲かたまの塊まりになっちまった」とありますが、ここでの店主の「欲」とはどのようなことですか。「欲」の内容として

最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア つる家のとろとろ茶碗蒸しを一段と美味しくするために努力を重ねていくこと。

イ つる家で濡ぬに料理の修業をさせて、一人前の女料理人として世に送り出すこと。

ウ つる家の名前を他の料理番付にも載せて、江戸以外の人にもお店の名前を広めること。

エ つる家の名前が料理番付に載ったことで、それをきっかけにさらに有名な料理屋にすること。

問2 ——線部②「暖のれん簾れんを出す」とありますが、それはどのようなことか、最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その

記号を答えなさい。

ア 夕方になること イ 商売をやめること

ウ 店の営業を始めること エ 同じ店名を名乗ること

問3 ——線部③「店主」・⑥「老女」とはそれぞれ誰のことを指していますか。次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、その

記号を答えなさい。

ア 滂 イ ふき ウ りう エ 種市 オ 伊佐三

問4 ——— 線部④「種市が素つ頓狂な声を上げ、尻餅をついた」とありますが、それはなぜですか。五十文字以内で答えなさい。

問5 ⑤・⑪ には、身体の一部を表す漢字が入ります。それぞれ漢字一字で答えなさい。

問6 ——— 線部⑦「嘲る声を上げた」とありますが、清右衛門が嘲る声を上げたのはなぜですか。その理由として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 滯は料理人であるにもかかわらず、自身の料理がどんな評価を得ているかを知らなかったから。

イ 今回の料理番付の結果は、料理の中身の評価より番付人気を高めるための策略にすぎないから。

ウ 今回の料理番付に面影膳が載った理由を、料理人でない清右衛門から聞く以外に方法がなかったから。

エ 清右衛門が好物の蕪の柚子漬けをすべて食べきってしまったのに、お代わりをすぐに持つてこないから。

問7 ⑧・⑨ に入れるのに最も適切な言葉を、次のア～オの中から一つずつ選び、その記号を答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上使用しないこと。

ア 敢えて

イ あたかも

ウ おそらく

エ せめて

オ まさか

問8 ——— 線部⑩「それでこそ、つる家の店主ですよ」とありますが、りうは店主のどのような思いに共感したと考えられますか。次のア～エの中から不適切なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 面影膳という料理を、お盆の時に食べる全ての人が、亡くなった大切な人を思いながら食べてほしいと願っていること。

イ 面影膳を食べたいとつる家に来る初めての客にも、亡くなった又次のことを想像しながら食べてほしいと考えていること。

ウ 面影膳を食べたい多くの人に食べさせることによって、つる家の利益を上げて店を大きくしようとは思ってはいないこと。

工 面影膳の名が世に知れ渡っても、つる家の者にとって又次の供養のために作られた料理だということを忘れてはならないこと。

問9 同じ料理でもその時の状況によってちがう味わいをもたらします。あなたにとってこれまでに食べたものの中で一番思い出に残る料理を一つ挙げ、なぜ思い出に残るのかを百字以内で説明しなさい。

三

次の①～⑤の文の——線部のカタカナを適切な漢字に改めなさい。

- ① 地方にキョジユウして、のんびり過ごそうと思っている。
- ② 上位合格もシャテイ圏内に入ってきた。
- ③ オリンピックで世界記録をジュリツする。
- ④ 経済が発展してもヒンプの差はなくならない。
- ⑤ このお店では、品物がハカクの安値で売られている。

以下余白

